

テキストと文体

——「言語行為」を視点にして——

菅 谷 泰 行

「文体」については考えるべきことが少なくない。まず文体の定義や機能の問題がある。また文体論という分野についても論及の必要が認められる。俗に文体論は文学と語学を結ぶ懸け橋と言われる。しかしこの発言も裏を返せば、この領域にまつわるあいまいさの指摘につながる。文体に対しては記述的方法・生成文法からの言及など、異なる側面からアプローチが続けられている。拙稿では「テキスト」との関連で一考を加えたい。テキストは文体の母胎であるし、その関係を吟味してみることは、「テキスト」にとっても「文体」にとっても有意義なことであろう。以下、文体の定義やテキスト言語学の展開を振り返りながら、特に「言語行為」を視点にして、テキストと文体について述べてみたいと思う。

1

まず「文体」(Stil)¹に関して、二つの代表的な定義に触れることにする。最初に文体は「選択」の結果とする見方、次に文体を「逸脱」とする解釈を取り上げ、問題点を指摘したい。

文体と呼ばれる現象は、言語表現の差を視点にして論じることが出来る。同じ内容について述べたとしても、書き手や話し手が違えば表現の仕方も異なる。同じ書き手による表現であっても、見方や心境の変化によ

て表現にも差違が現れる。同じ言語であっても、時代により表現上の異同があると推察してみることも可能である。このように見れば、文体に関してはまず言語表現の問題があり、その背後には、いろいろな表現を可能にする自然言語の柔軟性があると認められる。この言語表現の可能性を正面から見すえたのが、文体は「選択」の結果とする定義である。何かを言語を通して表現しようとするとき、言語手段が備えた文体的価値を配慮したり、ある効果を意識しながら、特定の表現を取捨することができる。この点を強調するならば、話者は特定の言語表現を選び得る立場にあると仮定でき、言語表現の可能性を選択の可能性と解釈し直すこともできる。このように言語表現の可能性を汲み取ってみたなら、表現の「選択」の問題が文体を規定する基本的要件として浮かび上がってくる。

「規範」(Norm)と「逸脱」(Abweichung)の概念は、選択の可能性を考察する二つの対立する視点である。あることを表現する際に、どのような選択の可能性が存在するのか、その可能性のすべてを漏れなく提示することは、現実にはできる仕事ではない。しかしその限界を認めた上であれば、ある程度の蓋然性に立って、表現の選択がどのように実行されるかを説明する可能性は否定されない。規範と逸脱の概念はそのための装置の役割を果たす。つまり規範としての中立的表現をあらかじめ想定しておき、考察の対象とした言語表現が、その「通常の表現」からどのように逸脱しているかを観察することによって、その言語表現の特徴を記述・分析しようとする考え方に立つものである。この観察の方法が持つ長所は、規範と逸脱という尺度の中に文体の概念を設置することで、文体の現象を極めて明確な対照の中で説明できるところにある。文体を美的対象とするにせよ、心理的産物と解釈するにせよ、文体が言語を素材にして成立する事実が変わりはない。独創的表現を尊重する見方もできるが、表現の個別的選択の自由に先立って、言語の「規範的」レベルでの言語表現の可能性や規制の問題があることは否定できない。だから文体という現象が、客観的な

規則性と主観的な個別性という二重の条件下で産出されていると仮定できるならば、一方ではある共時的断面での常態としての言語の問題、他方では文学作品などの個別的な文体の特質を取り上げることが可能になる。

まずこのように概観するならば、「選択」の可能性を出発点にして、文体を「規範」と「逸脱」の対比の中で考察する方法はある程度の説得力を持つことが分かる。近年の文体研究では、選択という概念は、文体に言及するための前提として設定されることが少なくない²、文体を規範からの逸脱とする洞察は今日最もよく普及した見地となっている。しかしこの二つの定義に問題がないわけではない。まず「選択」という語の持つ響きは、言語表現が常に意識的・計画的所産であるかのような印象を与える。また選択の可能性の強調は、文体の根拠を単に類義的表現の可能性や表現効果の問題だけに縛りつけることにもなりかねない。表現効果の過度の強調や文彩の指定が文体概念の形骸化を招くことは、古典の修辞学に対する一般的な批判として既に定着している。他方、逸脱としての文体という定義が議論の矢面に立っていることは周知のとおりである³。一つには、「規範」の概念が必ずしも確定していないことが挙げられる⁴。次に文学的表現に対するこの定義の無意味さが指摘される。文体が備えた文学的価値を視点にするなら、文学的な表現は逸脱した表現である必要はないとする批判である⁵。特徴的な表現を取り出し、その特殊性を強調しても、言語対象が持つ文学的価値を究明したことにならないのは当然である。「語学的文体論」・「文学的文体論」の図式に重ねるならば、一方には今日のドゥーデンのように実的な「語法」を「文体」(Stil)と解し、「ドイツ語の表現方法の可能性」⁶を教示しようとする文字通りの「規範的」立場だけでなく、「動詞文体」・「名詞文体」の区別の中でドイツ語の「慣用的」な面での時代的推移を探ったエガース (H. Eggers)⁷の優れた研究が存在する。しかし他方、文学の見地に立つなら、文体は詰まるところ価値の問題であり、表現の創造性やそれに付随する情意的・情感的意味の解釈が問わ

れる。シュタイガー (E. Staiger)⁸ は文体と作品を同一視し、芸術的な作品形成の本質として文体を考察し、カイザー (W. Kayser)⁹ は文体の解明を文学研究の中心的課題に置いている。そこではもはや「規範からの逸脱」といった文体の定義が機能しなくなることは明白であろう。

選択や逸脱の装置を使った文体の操作もこのような観点から眺めるならば、その不備を露呈してしまう。現在文体研究は困惑の中にあると指摘されている¹⁰。それは文体が「表現」であるという極めて基本的な事実に基づくものと推察する。文体の現象は、言語を素材にして成り立ちながらも、「表現」という人間の行為に関与する存在であるために、複雑な要因を含む。言語の使用面を捨象することはできず、常に人間の言語活動の問題を念頭に置いて攻究しなければならない。この点で選択や逸脱の概念は効力を失う。選択について見るならば、確かに選択の可能性は言語的なものである。しかし、選択の問題自体は、具体的な場面での言語外的要因を加味して考察しなければならない。他方、規範と逸脱に関しては、この概念の設定は、一面で文体の一般性と独自性という歴史的背景を持った根本的問題¹¹と関連し、簡単に否定し難い面を示しているように思われる。しかし何よりも、ある言語対象を逸脱とするとらえ方は、既にその表現を短絡的に個人の領域に押しやってしまったことを意味し、言語活動の中での文体の機能を客観的に把握する可能性を放棄してしまうことにもなる。この指摘は、文体を精神科学の対象としたシュタイガーの立場などにも当てはまるに違いない。文体は直観だけでなく、客観的な舞台を必要とする。

この点で文体論は現在、文体の現象をその基盤である「テキスト」との関連で問い直そうとする姿勢を、一段と際立たせているように見える。文体が表現であり、人間の言語行為と深く係わる存在であると仮定しうるのであれば、その基本である人間の言語活動の問題やコミュニケーションの媒体としての言語の機能を無視することはできない。次にテキスト言語学の歴

史を概観し、そこでのテキストの定義を見たいと思う。

2

テキスト言語学は、1960年代の中ごろから始まり、70年代に急速な発展を遂げ、今日に至っている言語学上の一つの方向ないし分野であり、次の基本的な考えを柱にしてテキストの研究を進めてきたと見なそう。つまり、まずテキストを

1) 「文を超える単位」(transphrastische Einheit)

ととらえ、第二にこの単位を、

2) コミュニケーション上の機能

から解明しようとする立場である。またその研究の姿勢としては、次の二つの「方向」¹²⁾を区別できる。つまり、

1) 言語体系に即した研究

2) コミュニケーション中心の研究

に分かちうる。以下この二つの観点を軸にして簡単に説明したい。

まず「文を超える単位」ということから述べるなら、言語学が取り扱うべき対象は「文」を最大単位とする考え方には強固なものがある。ドゥ・ソシュール (F. de Saussure) のラングとパロールの区別に立つならば、ラングの装置の中で言語学が扱いうるのは文までであると見なされる。テキスト言語学は、この因襲的とも言える態度を批判するところから始まる。すなわち文を超える言語現象にも、言語学が説明すべき規則性や法則性が存在するとする認識であり、そのような視点から言語現象と言語学そのものをとらえ直そうとする立場である。方法論的には、眼前の「テキスト現象」に対して、理論的に一般性を持った「テキスト」の構築が試みられる。このときに中心となる概念が、テキストをテキストにしているもの、つまりテキストの「テキスト性」である。シンタックスのレベルでは文の

文法性が中心に置かれるが、テキストのレベルでは統語面の破格は問題にならず、テキストを成立させる基本的要件を問いただす必要があるためである。テキスト性については、例えばドゥ・ボウグラント (R. A. de Beaugrande) とドレスラー (W. U. Dressler) の2人¹³によって七つの規準が提示されているが、文を超える現象に目を向けるとき最も重要な概念となるのが、テキストの「結束性」(Kohärenz)である。結束性に対するテキスト言語学のほぼ共通した認識は、結束性はテキストを構成する文のつながりから生み出されるとする点にある。ある文と文とが無関係でなく、それらの文が一つの全体を成していると感じられる場合、その全体性は文法面や意味論的な面で何らかのつながりによって保証されているからだ、とすることができる。テキストの結束性とは、文を超える言語現象が形式や意味や機能の面で見せる関連性を指す概念である。テキスト言語学にとって、このテキストの結束性の解明は一つの中心的な課題である。結束性に関しては、統語論・意味論・語用論の三つの側面から論及が行われ、それぞれの観点の下でテキストの定義が与えられている。もちろん歴史的に見れば、統語面から語用面へ重心を移してきている。以下、順を追ってその定義を顧みておきたい。

・最初に統語論的な面から述べれば、まず結束性を表示する文法的手段が研究の焦点となる。具体的には指示の同一性を手掛かりにして、接続詞・冠詞・代名詞などの文法手段や語の反復などの言語現象を取り上げ、これらの手段の表現面における指示関係の解明が企てられる。この立場からのテキストの定義の代表的なものとして、テキストは連辞軸上での指示の連鎖である、と推察したハルヴェーク (R. Harweg) の初期の研究¹⁴を、挙げることができる。しかし次に意味論的な方向に目を転じるならば、テキストの結束性は文法的手段だけの問題ではないことに気付く。たとえば表現面で指示の同一性が保たれていなくても、何の違和感もなく文のつながりを作り出せるからである。人間が事柄に対して抱いている知識、例えば

論理的な因果関係・反意関係に基づき、文の結合を必然性を持った形で行うことができる。この点を意識するならば、統語面でのテキストの定義はいまだ不十分であると考え直さなければならない。表面的な文の結合の問題だけにとどまるのではなく、むしろそのような結合を可能にする意味論的な必然性や整合性から、テキストを究明する必要が生まれる。この見地からのテキスト規定の試みが、ファン・ダイク (T. A. van Dijk)¹⁵⁾ やアグリコーラ (E. Agricola)¹⁶⁾ によって具体化された「テーマ」の想定である。これは「マクロ的」なアプローチの方法であり、テキスト全体を統轄する意味基底への着目である。この構想はテキストの根幹に係わる問題を提起していると言える。

しかし視点を意味論的な面からさらに語用論の方向へ移すならば、このテキストのマクロ構造が基本的要件であるとしても、この概念がテキストを解き明かす唯一の可能性であるとは見なすことはできない。例えば、ある文と文の結合がたとえ理屈に合わないものであるとしても、話者がその不合理さを承知の上で、その結合を作り出しているのであれば、そのつながりの中にも一つの関連性を読み取る可能性が生じるからである。つまりテキストを産出した側の意図を含めて、あるいはむしろそれを基点にして、コミュニケーション場面の中で、テキストを語用論の面から根本的にとらえ直し定義する必要が認められるのである。

ドイツのテキスト言語学は、およそこのような展開の中で、さきに述べた二つの「方向」、つまり言語体系に即した方向とコミュニケーション中心の方向という対立する軸をめぐる、今日まで研究を進めてきたと見てよい。体系に即した研究では、テキストの結束性を意味論的な基盤の上で構想し、その必然性を解明しようとする考え方が中心であり、これを「テーマ中心」の方向と呼んでもよいと思う。しかしその流れの中で、コミュニケーション中心の指向が一層強く前面に押し出されてきたことは間違いない。もちろんこのコミュニケーション中心の立場を取るとき、果たしてこ

の二つの方向が相互補完の関係にあるのか、あるいは同一の「テキスト」を想定しているのかという、根源的な問題が提起されなければならないことも確かである。

テキスト言語学は、テキストは人間の言語活動の基本的単位であり、この単位は侵すことのできない絶対的なものであるとする根本的な認識に発している¹⁷。この見地からすれば「テキスト」は、既に言語学がこれまで考察の対象にしてきた音素・形態素などの抽象的単位はもとより、その延長線上の概念と見なしうる「語」や「文」と肩を並べる存在ではない。テキストはそのような抽象の中ではなく、コミュニケーションという言語の具体的発現の場に設定されている。しかしコミュニケーションの言語的媒体としてテキストを究明しようとすれば、複雑な要因から目を背けることはできない。言語が人間のコミュニケーションの中心的な働きを担っていることは、誰の目にも明らかである。だがコミュニケーションは言語によってのみ実現されるのではない。身振りや表情もコミュニケーションの媒介を果たし、具体的な場面では言語とこれらの媒体との結び付きは強い。したがって言語が持つコミュニケーション上の機能を解明するためには、そのような非言語的手段との関連を考察の外に置くことはできない。また、コミュニケーションという現象が人間相互の社会的所産でもあると認められる以上、コミュニケーションの問題自体も、その社会との相互作用というより大きな視野の中で攻究されねばならない。テキストをコミュニケーション中心の立場から解明することは、コミュニケーションの媒体としての言語の機能にテキストの定義を重ねることであり、人間の言語活動が背後に持つこの多次元的なコミュニケーションの構図全体が、「テキスト」という言語的産物の規定に結び付かなければならない。そこではもはや言語体系上の抽象的な構築物としてテキストを静態的にとらえることが難しくなると言わざるをえない。

この点で、言語体系に即したテキスト研究とコミュニケーション中心の

それとを対置するなら、前者においてはデイクの初期のテキスト・モデル¹⁸に見られるようにシンタックス研究の援用と修正が企図¹⁹されているが、後者においてはそのような立場の否定を前提としていると言える。後者のようなテキストへのアプローチは、例えばシュミット (S. J. Schmidt)²⁰の研究に顕著に現れている。もちろんそこでは「テキスト」は単に「文を超える単位」ではなく、具体的なコミュニケーション場面での人間の言語行為の問題として扱われることになる。

現在テキスト言語学はこのような観点の下で、具体的な発話を形成する諸条件を究明しようとする語用論に依拠しながら、複合的な人間の言語行為としてテキストをとらえる方向を示しつつある。ではそのようなテキストの把握と文体とは、どのように関係するのだろうか。さらに「テキスト型」の問題を探り、このテキスト型との関連で文体に触れたい。

3

テキスト型 (Textsorte) という語は統一用語ではなく²¹、まだ十分に検討された概念であるとは見なし難い。ここでは一応「テキスト型」という呼び方をして、考えを進めてゆくことにする。

簡単に述べれば、テキスト型の設定はテキストの類型化の試みであり、詩や小説のような既存の文学上のジャンルはもちろん、電報・広告文・新聞記事のような日常の領域で使われるテキストの部類も含めて、その類別と分類を行うものである。このテキスト型の設定が持つ意義は、何よりもその解明がテキストの定義にもつながるという点に求められる。上に触れたとおり、テキスト言語学はコミュニケーションという極めて実際的な見地から、言語の現象と言語学をとらえ直そうと指向している。ただテキストの定義に関しては、十分に納得できる成果を提示していない。テキストはコミュニケーション上の機能を担った媒体と定義できるが、この指摘だ

けでは「言語はコミュニケーションの道具である」といった表現を言い換えたにすぎない、とする見方も許されよう。確かにテキスト言語学は、言語学そのものと同義的に重なる大きさを備えているが、それだけにテキストの定義に関してのあいまいさは課題として残る。また一つの方向であるテーマ中心の研究の中で、抽象度の高いテキストの構造に関する分析²²が進められているが、そのようなテキストの内部構造の研究ももう一段深い段階で検証する必要も認められる。このようなところから、テキスト型の問題は最近研究者たちの関心を集めつつある。

歴史的に振り返っても、テキストの定義は言語学ではなく、文芸学などのジャンルで扱われてきた。この点でテキスト型の発想は、そのような伝統的なジャンルの問題をテキスト言語学の目を通して新しく修正・補完する試みであると言える。例えばある物語を読んで、読者が「このテキストは」と表現したとすれば、その読者は物語の型といったものを念頭に置いて「テキスト」という表現を使ったと推論できる。つまりそこでは、一般性の高い「テキスト」の概念とある特定のテキストの「型」とを重ねた中で、「テキスト」の語を使ったと仮定できる。とすれば、あるテキストがテキストであるかないかの判断は、そのようテキストの型や種類の問題を見極めた上で下されるべきである。この点でテキスト型の設定は、抽象的なテキストと具体的な実際のテキストの媒介として、一方では可能なテキスト型の相互の関係を吟味して妥当なテキストの考え方を提示する可能性を与えるし、他方ではテキスト型の設定の中で個別に現れた具体的なテキストに一つの操作の規準を与えることも可能にする²³。このようなねらいの中でのテキスト研究の成果は、プロップ (V. Propp) に始まる民話の研究などに具体的に示されている²⁴。

しかしこのテキスト型の究明が、言語的な枠の中だけでは達成し難いことも確かである。それは、このテキスト型の概念が単にテキストの分類や類別のためではなく、コミュニケーションの問題として、発話場面の典型

化と言語行為の特定化の意図の中で、生み出されているからである²⁵。コミュニケーション中心の立場からテキストを解明するためには、テキストの発現の場である場面性の究明が根本的要件になることは論をまたない。場面の問題は多分に恣意的な要因を含み、複雑な現象である。実際の言語使用の場では無数の発話の場面が作り出され、様々な要因が関与する。そのような個別に具体化された場面の問題を抜きにして、テキストの定義はありえない。しかしテキストを対象とするかぎり、場面性の問題を全く恣意的・個別的な事象として済まし難いことも明白であろう。コミュニケーションの現象を社会的所産であると認めるならば、場面性に関する設問も社会的なコミュニケーションの問題として扱う可能性が生じる。テキスト言語学がそのようなコミュニケーションの縮図としてのテキストを想定していることは既に述べたことから推察できる。ここでは、社会的な場面性やコミュニケーション・タイプを背景にしたテキストへのアプローチの試みが問われているのである²⁶。

テキスト型はこの問い掛けの中に置かれている概念である。人間が備えた「コミュニケーション能力」を問うならば、人間の有する言語能力は抽象的な言語産出の問題に限定されない。個々の場面に応じて適切な発言を行う能力も人間には備わっている。このようなコミュニケーション上の能力を持っているがゆえに、人間は具体的に現れ出た無数の個別的場面に対応してゆけるのだと考え直すこともできる²⁷。テキスト型はこの語用論の基幹ともなる発想に支えられた概念である。つまり人間がこのようなコミュニケーションのための能力を前提にして個々の場面に対応し、対人的・社会的行動を取っているのであれば、当然その中に人間の相互的な行動に関連したコミュニケーション行為の「図式」を認知する仕事が試みられてよいはずであり、同様に「テキスト」の中にも同じ手続きを行う必要が生じる。例えば社会のある活動分野に相応した特定の活動形式の存在を想定することもできる。同じく人間の言語活動についても、それが特定の分野

や領域の中で行われる以上、その分野や領域との関連の中で一つの図式を描く可能性があることは否定し難い。このように考えるならば、活動領域とか分野のような極めて広範囲に及ぶ問題を、特定のコミュニケーション場面に対する設問に編成し直すことによって、人間の言語活動の全体を総合的に、またより厳密に説明する可能性も出てくるに違いない²⁸。テキストがコミュニケーションのために介在している限り、あるコミュニケーションの場で実現された「テキスト」の中に特定の「形式」の存在を探り、その裏にある人間の言語行為の図式を引き出すことは、必要でありまた可能でもある。人間が人間に対して行うコミュニケーションという対人的・社会的行為の中心的機能が「テキスト」であるなら、「テキスト型」はその対人的・社会的行為のひな型と認められる。しかし正にこの視点に立ったとき、このテキスト型の企ては先に述べたテキスト定義に直結するコミュニケーションの構図全体を意味するものとなり、この概念もまたテキスト言語学が抱える問題の中枢部に帰ってゆくと言わざるをえない。

この点で、例えばボウグランド／ドレスラーの、テキスト型はテキストを形成する諸条件と一体であり伝統的な枠組では解決できない、とする指摘²⁹は正当であると評価してよい。テキスト型は確かにテキストの類型化の試みである。しかし課題はあくまでもその類型が持つ機能であり、テクを数え上げてゆくだけでは済まない。コミュニケーション中心の立場に立つ限り、言語内的な特徴だけの問題としては片付け難い。さて最後に、コミュニケーション場面の特定化に関与するテキストの「意図」に触れ、テキスト型と文体の関係を考察したい。

4

言語行為を視点にしたテキスト型という考えからは、文体の現象はどのように解釈できるだろうか。テキスト型の問題が文体と関係することに疑

問はない。文体とジャンルとの関係を扱った先駆的業績には、1930年代のプラーク学派の機能的文体論³⁰がある。また早くにゾヴィンスキー (B. Sowinski)³¹は「文体特徴」との関連で論じている。しかしこの両者の関係は、文体の出発点とした「表現」の意味を問い直すところから始まると言える。

本稿の初めに見たように、文体の現象を表現手法の問題とする立場は決して有意義な考え方ではない。文体を表現上の手法とする見方は修辞学から引き継がれてきた因襲的な姿勢であり、この立場を取る限り表現の問題は内容と形式的に対立する。つまり人間の念頭に浮かぶ思考が前言語的な形で先行し、その思考内容に「言葉の衣」を着せてやるのが表現である、とする結論が導き出される。この結論に立脚すれば、文体は一方で表現技巧の問題となり、他方内容を優先させる結果、文体の存在意義は学問的に否定されてしまうことになる。これは文体論が抱える一つの大きなジレンマと見なすことができる³²。しかしテキストの機能の観点からすれば、内容に関する問いは思考内容だけのことではなく、表現は内容の表面的な器ではない。テキストの意味や機能に目を向け、それとの関連で文体の働きを異なる基盤の下で新たに考え直す必要があるのではないだろうか。例えばテキストのレベルでの「意味」については、一方でコセリウ (E. Coseriu)³³の発想の中に際立った形で示唆されているように、テキストの「意」(Sinn)の概念の中で論及が始められている。このような見方が成り立つのは、テキストの意味機能の問題が単に言語に内在する「意味内容」の考察や、言語外事象への「指示」の究明だけでは片付き難いとする認識が働いているからにはほかならない。テキストが単位であり、意味の上で一つのまとまりであるとして認定するためには、それがコミュニケーションの媒体である以上、そのような人間の言語行為との関連で扱わねばならない。この点から見て修辞学の形式論では、思考内容の強調によって、言語が持つ意味機能を「指示」に限定してしまっているように感じられる。

し、文体がテキストの意味や機能にどのように関与しているかということに、目が向けられていないと考えられる。

言語行為からテキストの機能を究明しようとするとき、テキストの機能は情報の伝達だけでは終わらないという事実を強調することは、表現の問題を考察してゆく上で重要である。通常、テキストの生産者があるテキストを産出したとき、そのテキストには命題的内容だけでなく、生産者の意図や目的が含まれる。例えば「あの男はまだここにいるよ」という発言がなされた場合、この発言には文字通り「あの男がここにいる」という命題的内容だけでなく、コミュニケーションの場の中での注意・警告・脅かしなどの話者の意図が託されている。テキストをコミュニケーションの媒体とする見地を確認すれば、テキストが果たすべき中心的機能は、話し手と聞き手との間に行われる意志疎通と相互理解に求められるべきである。しかしその点を更に押し進めるなら、命題的内容を前提にしたこのようなテキストの「意図」が聞き手に共有されたときに初めて、コミュニケーション行為が遂行されたと言いうる。

言語表現を人間の行為として把握するためには表現と内容の対立が決して修辞学的な見方の中だけにあるのではないと認めるべきであろう。確かにあるテキストの命題は、その言語表現の内容を形成する。しかしその命題的内容は、言語表現に託された行為の内容のすべてではない。言語行為が意図を通して行われる対人的行為であるならば、その意図は行為の内容的側面を構成する基本的要因である。テキストを解明する上でも、また表現としての文体を究明するためにも、このテキストの意図は本質的な問題を提起しているのである。

しかしこの確認の中で、その意図を生み出している生きた人間の存在が、コミュニケーションの主体として前面に出てくるという事実も見逃してはならない。テキストや文体が人間の行動や活動に関連しているとする意識は、別に新しいものではない。修辞学の伝統の中で表現効果が強く意

識されたのも、例えば弁論という人間の言語行動の場で、言語表現が持つ機能に着眼したからにはほかならない。しかし文体手段の固定はもとより、言語とコミュニケーション場面の形式的な対応は、言語活動の実際から遠ざかる危険性を常に持っている。コミュニケーションは生きた人間の営みであり、人間によって産み出されるがために言語活動は現実的である。人間が人間に対して行う言語行為の中心に「テキスト」を設定した以上は、何よりもまず、そのテキストを産出し受容する「主体」としての人間の関与を忘れてはならない。

この論点を踏まえてテキスト型へ視点を移すならば、さきに「形式」・「図式」といった表現を取り、コミュニケーション場面との連関を示唆してきたこの概念は、決して固定した実体ではないことを改めて了解しておくべきであろう。テキスト型の問題はあくまでも、生きた主体の関与として見定めなければならない。それは「ジャンル」といった形式的な範疇からは既に遠く、眼前の実体としては把握し難い。テキスト型はコミュニケーションの場を形成する主体の相互の働きかけの中に実現される生きた「図式」であり、シュミットの言葉を借りるなら、「相互行為の類型」³⁴として置かれていることを確認しておかなければならない。

テキスト型を確定する仕事には大きな困難が予想されるし、生きた言語現実としてテキスト型をどの程度に明示できるかは今後の課題である。ただこのようにコミュニケーションの主体を押し出しながらテキスト型に目を向けるならば、そこに言語表現としての文体とのかかわりも見えてくる。

もちろん両者の関係として、テキストの類型が文体上の類別に結び付くことを指摘するのはたやすい。例えば「手紙」というコミュニケーションの形式を取り上げるならば、この形式に対応した「書簡体」が導き出せる。さらにそれが公的な通信のために使用されたのか、個人の私信であるかなどの観点から考察できる。しかし「主体」による表現の意味を問う立

場を取るなら、コミュニケーションの中で文体が果たす機能を更に問い詰めてみる必要がある。さきに示唆したように、話者の意図がテキストの内容に深く関与していると考えられる以上、そのような内容に対する表現としての文体の意義を探り出す可能性が生まれるのである。

つまり発話行為理論では言語行為の前提として話し手と聞き手の「志向性」(Einstellung) という考え³⁵ が取り上げられるが、文体の中にそのような志向性の特定化の可能性を探ることができる。志向性は二つの観点から考察される³⁶。一つは、話し手が産出した表現内容に対して持つ志向性であり、次に、話し手が聞き手との関係の中に抱く「対人的」な志向性が問われる。表現の問題はこの対人的な志向性に関係すると想定できる。現実のコミュニケーションの場では、この対人的な関係が無視できない要因であることは論をまつまい。テキスト生産者は相手の立場や注意などに気を配り、推測や判断を重ねながら、テキストを産み出していると仮定できるからである。この意味で、ある意図を遂行しようとする場合には、この対人的な志向性の問題が関連してくると予測してよい。例えば何かを「命令」し「要請」する場合、それは直接的にも間接的にも表現でき、話者の立場や聞き手への期待などの具現化を探ることが許される。だからもしこのような見地に立ちうるならば、個別的なテキストの枠組としてのテキスト型の中にも、そのような志向性の局面が顕現すると推断できる。とすればテキストの意図を抛り所にしてテキスト型を設定し、そこに集めうる言語表現を取り上げるとき、その中にそのような局面の実現を読み取ることも可能になる³⁷。人間が相手に対して何かを伝えようとしてテキストを形成したとき、そのテキストは様々な課題が課せられているなら、その課題の遂行は実現された表現の意味を構成すると言えるからである。テキスト型の概念はこの点で、そのようなコミュニケーション行為に結び付いた対人的関係の一局面の実現の問題に関与し、表現の問題は人間の言語行為と緊密な関係を持つことになる。

表現が行為の局面に関与するかぎり、ある表現の実現はその行為の遂行を意味し、それは表現の内容を形作る。この観点に文体が表現として持つ一つの意義を求めることができると思う。普通、文体を内容と表現の中で見たとき、それは「何が」表現されているかよりも、「どのように」表現されているかを視点にする。しかし、この「どのように」ということは単に内容に対する外形的表現のことではない。「何か」を伝えようとすることは、それを「どのように」伝えるかということでもある。この二面を言語を通して遂行しようとする人間の行為の中に、文体は出現すると考えることもできるのではないだろうか³⁸。

テキスト言語学の出現に伴い、文体論の立場は現在動揺していると指摘されている³⁹。後者に対する否定的見解、両者の補完を考える立場など様々である。しかしいづれにせよ、文体は一つの表現であり、人間の営みとの連関の中でそれを考察する視点を失ってはならない。ハフ (G. Hough) は、非常に歯切れのよい口調で文体を論じながら、次のように述べている。「ロマン主義の詩人の文体とポープの流派（新古典主義）の文体とが異なっているのは、同じことを言うのに異なった言い方をしたためなのか、それとも異なったことを言ったからだろうか。多分後者の理由であろう。そしてこのことを考えてみればみるほど、異なった言い方を果たしてどの程度まで問題にできるかが、いよいよ疑わしくなる。各々異なった言い方とは、実は異なったことを言っているということにはならないだろうか。」⁴⁰

このハフの問いかけには考えるべきものがあると思う。しかし残念ながら、ハフはこの自らの問いに答えてはいない。「異なった言い方とは、実は異なったことを言っていることにはならないか」というハフの問いかけが正当に評価されるべきものであるならば、それに対する答えは、「異なったことを言っている」とは、実は「異なった行為を行っていることではないか」と、もう一度問い掛けてみるところから導き出されるのではない

かと思える。今後さらに、「文体特徴」の問題などを焦点に論及を続けたいと考える。

注

- 1 「文体」(Stil)の語の歴史と定義については次の文献を参照のこと。E. Castle, *Zur Entwicklungsgeschichte des Wortbegriffes Stil*. In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift* 6, 1914, S. 153-160. U. Püschel, *Linguistische Stilistik*. In: *Lexikon der Germanistischen Linguistik*, Hrsg. v. H.P. Althaus/H. Henne/H. E. Wiegand, Tübingen 1980, S. 305f. G. Kurz, *Zur Einführung: Stilfragen*. In: *Sprache und Literatur* 55, 1985, S. 1f.
- 2 Vgl. H. Pinkster, *Lateinische Stilistik*. In: *Sprache und Literatur* 55, 1985, S. 69.
- 3 Vgl. J. Trabant, *Poetische Abweichung*. In: *Linguistische Berichte* 32, 1974, S. 45-59.
- 4, 5 B. Spillner, *Stilistische Abwandlung*. In: B. Sandig (Hrsg.), *Stilistik Bd. 1: Probleme der Stilistik*, Hildesheim/Zürich/New York 1983, S. 62.
- 6 *Duden, Stilwörterbuch der deutschen Sprache. Der große Duden* Bd. 2, Mannheim 1970 の前書きからの引用
- 7 H. エガース『二十世紀のドイツ語』岩崎英二郎訳 1975年 白水社
- 8 E. Staiger, *Die Kunst der Interpretation*, dtv Wissenschaftliche Reihe 4078, München 1977, S. 11f.
- 9 W. カイザー『言語芸術作品』紫田斎訳 1972年 法政大学出版局
- 10 Kurz, a. a. O., S. 2.
- 11 Ibid., S. 1f.
- 12 二つの方向をめぐるのテキスト言語学の歴史的・学問的な立場については、拙論『テキスト言語学研究(一)——二つの「方向」をめぐる——』関西大学院生協議会編「千里山文学論集」33号 22-45ページを参照のこと。
- 13 R. A. de Beaugrande/W. U. Dressler, *Einführung in die Textlinguistik*, Tübingen 1981.
- 14 Vgl. K. Brinker, *Zum Textbegriff in der heutigen Linguistik*. In: H. Sitta/K. Brinker (Hrsg.), *Studien zur Texttheorie und zur deutschen Grammatik*, Düsseldorf 1973, S. 16.
- 15 T. A. van Dijk, *Aspekte einer Textgrammatik*. In: W. Dressler (Hrsg.), *Textlinguistik*, Darmstadt 1978, S. 268-299.
- 16 E. Agricola, *Vom Text zum Thema*. In: F. Daneš/D. Viehweger (Hrsg.), *Probleme der Textlinguistik 1*, Berlin 1976, S. 15.

- 17 Vgl. P. Hartmann, *Texte als linguistisches Objekt*. In: W. D. Stempel (Hrsg.), *Beiträge zur Textlinguistik*, München 1971. S. 10f.
- 18 Dijk, a. a. O., S. 292.
- 19 Vgl. D. Viehweger, *Textlinguistik*. In: *Kleine Enzyklopädie. Deutsche Sprache*, Hrsg. v. W. Fleischer/W. Hartung/J. Schildt/P. Suchsland, Leipzig 1983, S. 214f.
- 20 S. J. Schmidt, *Text als Forschungsobjekt der Texttheorie*. In: *Der Deutschunterricht* 24, H. 4, 1972, S. 7-28.
- 21 例えば Viehweger は理論的な妥当性を観点にして, Textsorte と Texttyp を区別している. D. Viehweger, *Texttypologie*. In: *Kleine Enzyklopädie. Deutsche Sprache*, S. 231f.
- 22 Vgl. E. Agricola, *Textelemente und Textstrukturen*. In: Ibid., S. 220 f.
- 23 Vgl. M. Dimter, *Textklassenkonzepte heutiger Alltagssprache*, Tübingen 1981, S. 1f.
- 24 例えば Gülich/Raible はテキストの内在的規定の問題に関連して, Propp の考え方を援用しようとしている. E. Gülich/W. Raible, *Textsorten-Probleme*. In: *Linguistische Probleme der Textanalyse*, Düsseldorf 1975, S. 159.
- 25, 26 Vgl. F. Lux, *Text, Situation, Textsorten*, Tübingen 1981, S. 30 f.
- 27 Vgl. D. Wunderlich, *Die Rolle der Pragmatik in der Linguistik*. In: *Der Deutschunterricht* 22, H. 4, 1970, S. 13.
- 28 Vgl. G. Michel, *Sprachstilistik in der DDR*. In: *Sprache und Literatur* 55, 1985, S. 46.
- 29 Beaugrande/Dressler, a. a. O., S. 193.
- 30 Vgl. G. Michel, *Grundzüge der Stilistik*. In: *Kleine Enzyklopädie. Deutsche Sprache*, S. 483-489.
- 31 B. Sowinski, *Deutsche Stilistik*, Frankfurt a. M. 1972, S. 332 f.
- 32 G. ハフ『文体と文体論』四宮満訳 昭和47年 松柏社 13ページ以下 参照のこと.
- 33 E. Coseriu, *Textlinguistik*, Tübingen 1981.
- 34 Vgl. Lux, a. a. O., S. 30 f.
- 35 Vgl. W. Motsch, *Sprachlich-kommunikative Handlungen*. In: *Kleine Enzyklopädie. Deutsche Sprache*, S. 500 f.
- 36 Vgl. W. Holly, *Imagearbeit in Gesprächen*, Tübingen 1979, S. 6.
- 37 Vgl. U. Püschel, *Die Bedeutung von Textsortenstilen*. In: *Zeitschrift für Germanistische Linguistik* 10, 1982, S. 28-37.
- 38 Vgl. U. Püschel, *Das Stilmuster „Abweichen“*. In: *Sprache und Literatur* 55, 1985, S. 12.

39 Vgl. Michel, a. a. O., S. 49 f.

40 G. ハフ 前掲書 15ページ.

付記

本稿は、昭和60年11月17日大阪電気通信大学における日本文体論協会第48回大会での口頭発表の原稿に、若干の修正を加えて作成した。

Text und Stil

——aus der Sicht der Sprachhandlung——

Yasuyuki Sugatani

Mit der Entwicklung der Pragma- und Textlinguistik ist die konkrete sprachlich-kommunikative Tätigkeit des Menschen in den Mittelpunkt des linguistischen Interesses gerückt. Selbstverständlich steht auch die Forschungstendenz in der heutigen Sprachstilistik insgesamt mit dieser jungen kommunikativ-pragmatischen Ausrichtung der Linguistik im engen Zusammenhang. „Stil“ wird zweifellos auf die Einheit „Text“ bezogen. Es gibt wahrscheinlich keinen Text ohne Stil, und ohne den Text zu behandeln, kann der Stil nicht erfaßt werden. Aber was ist eigentlich „Text“? Was ist an einem sprachlichen Text als „Stil“ zu verstehen? Die Frage ist also, in welcher Weise das Phänomen Stil mit dem Text zusammenhängt, und welche Beziehungen zwischen Textlinguistik und Stilistik bestehen.

Die vielfältigen Versuche zum Verständnis und zur Definition von Text lassen sich im Grunde auf zwei Ansätze zurückführen. So wird einerseits ein Text sprachsystematisch zugeordnet, andererseits aber der Textbegriff unter dem Primat des pragmatisch-kommunikativen Aspekts eingeführt. Bei einem kommunikationsorientierten Zugang zum Text wird die pragmatische Dimension

nicht länger als Zusatzkomponente gesehen. Zur Textauffassung spielt sie eine zentrale Rolle. Handlungstheoretisch gesehen, ist die Sprache keine autonome Zeichenmenge, sondern soll erst aus Zusammenhängen der sozialen und gesellschaftlichen Interaktion erklärt werden. Die Bevorzugung dieser grundlegenden Auffassung führt zur Einsicht, daß Texte als Produkte der sprachlich-kommunikativen Tätigkeit des Menschen verstanden werden. Ein Text ist folglich primär als eine handlungsbezogene Einheit anzusehen, die unter jeweils konkreten gesellschaftlichen Bedingungen im Ensemble mit den nicht-sprachlichen Handlungen ausgeführt wird.

Der Begriff „Textsorte“ eignet sich zur Definition des Textes. Er dient dem Versuch einer Texttypologie. Eine Beschäftigung mit diesem Forschungsobjekt ist aus zwei Aspekten besonders wichtig: Einerseits weil die Textualität erst erfaßt werden kann, wenn man alle Klassifizierungen von Texten berücksichtigt, andererseits weil jeder konkrete Text auf seine Zugehörigkeit zur Textsorte hin genau untersucht werden muß. Aber Textsorten lassen sich oberflächlich nicht einfach als Textklassifizierungen verstehen. Dieser Begriff wird unter Abzielung auf die Typisierung der kommunikativen Situationen und die Spezifizierung der Sprachhandlungen gebildet. Im Rahmen der Sprachpragmatik läßt sich die Frage nach der Situation im Zusammenhang mit der sozialen Sprachhandlung stellen. Der Begriff „Textsorte“ liegt dieser pragmatischen Ausrichtung zugrunde und wird in dieser Hinsicht als ein Muster für komplexe sprachliche Handlung erfaßt. Wenn man der sprachlichen menschlichen Tätigkeit handlungstheoretisch die sozialen Situationen zugrundelegt, kann man in den konkreten Kommunikationssituationen eine bestimmte Organisationsform der sprachlich-kommunikativen Tätigkeit feststellen. Aus dieser Blickrichtung ist die Textfunktion als eine Textsorte erfaßt, die in sich so einen bestimmten situationsspezifischen Kommunikationstypus realisiert.

Diese textsortenspezifische Muster beziehen sich auf die sprach-

liche Gestaltung der Texte oder der Äußerungen. Man könnte also sagen, daß die Textsorten immer zugleich Stilmuster umfassen. Doch stellt sich das Problem, daß der Textsortenstil nur eine Eigenschaft einer sprachlichen Äußerungen ist. Für die Äußerungen ist Stil nicht als nur äußerliche, sondern als wesentliche Erscheinung zu verstehen. Der Textsortenstil läßt sich im Verhältnis zur Bedeutung der Textäußerung darstellen. Ein bestimmter Stil informiert, wie die Textäußerungen gemeint und verstanden werden. Sprachpragmatisch gesehen, umfaßt der Mitteilungsinhalt nicht nur die propositionale Information, sondern auch einen Beziehungsaspekt, wie der Sender die Mitteilung vom Empfänger verstanden wissen will. Dieser illokutive Inhaltsaspekt ist aufschlußreich für die kommunikative Funktion. Hier kann man eine wesentliche stilistische Funktion sehen. Der Sprachstil signalisiert bestimmte Einstellung und Beziehung zum kommunikativen Gegenstand oder zum Interaktionspartner. Der Stil läßt sich daher auffassen als Art und Weise, wie die Handlungen des Menschen sprachlich ausgeführt oder formuliert werden. Unter diesem Aspekt kann man sagen, daß der Stil als Zusammenhang zwischen dem Inhalt (Was) und dem Ausdruck (Wie) erfaßt werden muß. Dieses Verhältnis zwischen Wie und Was ist sicher kompliziert. Aber seine Untersuchung ist nützlich, um Text und Stil explizit zu machen.